手帳 No.4 （断片　明治38年～39年）

俳諧手帳

作者者し空想に偏すれば陳腐に墮ち易く自然を得難し若し寫實に偏すれば平凡に陷り易く奇闢なり難し空想に偏する者は目前の山河郊野に無數の好題目あるを忘れて徒らに暗中を摸索するの傾向あり寫眞に偏する者は古代の事物隔地の景色に無二の新意匠あるを忘れて目前の小天地に躊躇するの弊害あり……子　規

東北大學圖書

七草や跡にうかるゝ朝がらす　其角
蓬萊の山まつりせむ老の春　蕉
春日野の子の日に出たり六歌仙　子規

(1) 西面 — 男 / 女 — 回る仏ヨリ云ヘバ天使スル男ノ感ト女ノ感トヲ分ケタ
ル (ハ) ヨリ成ル

(2) 生 — 少女 / 青年 / 老人 — 苦ノ人生觀ヲ表ワセルモノ

(3) 貴ヒ見れ〻人ヲ殺すに至る迄の行為ハ理的ニ成ラ

(4) 趣味 — 美術

(5) 俳句

餅鏡	菜蓬	餅	松門	水若	内の松	日子	歳旦
花餅	祝水	入藪	長義左	日人	日子	方惠	

初市や雪に潜来る若菜船　嵐
年玉や杓子数そふ草の庵　太
萬歳の子も萬歳の十二歳　子

(6)
一日、朝一、朝二、三、四、午后一、午后二、三、四、トろつ尼にカラ。ゑゞ一
家内ノ姪、息子、孫、孫おが秋ノ日の西あかん朝にれテ天堂ヒテ
尼ル掛ヲカラ。夫しカう次ニ夏一人ガ心にゲマターベンスヲ起ス。他
者ハ手来デ居ル。次ニ冬二ノ尼ル。次ニ又一人ガ何カ不平ヲ起ス。他
つゝ尼ル。次ニ冬二ノ者ガ心配ノ事ヲ話ふ。強ン者ハ手来デ居る。
つゞしゝ一日のうちに家内中何のうるがおまて時に喧嘩でル
ろうがゑまんと子ろうをつゞく。世の中は無ウ易しいものでなく
居ヲ一ゝ居ゝてもすぐ心配ガ起るものゞとろうを引張り
で来ます。然しろうゞデナイ掛に極めて無理のない掛につゞく

年礼　初夢　年玉　福引　歌かるた　初芝居
歳暮　懸文賀　南始　初暦　帳ごと　居森

(7)
梦の枕土宝あををつゞく。
埃及のマミ一ニナルて。埃及ノ有様や埃及ノ神かゞ
情を色彩に表ハル
希臘ノ美尼プロメレアスやイーゲパスを尼にして
尼ゝ所を見おしゝ有曲様を堂表的にのゝる堂
尼の様送中。見知人の結夏をつゞく

出霞のつゝみおほせぬ初日哉　溟
野一遍雪見ありきぬ雑煮腹　召
ほの暗き忍び姿や嫁が君　化
碧梧桐　波

雑煮　太　箸　曲　福　月正骨　羽　手
春駒　猿曳　日初　り降御　君が嫁　毬

春の夜にたれか初瀬の堂籠
高き窓に春の寒さなしのびけり　曾根
初午や狐の口の玉寒き　獅儿
子蕾

(8)
虚籠に老ちゝん訪ひ来る。若妻の炙つくる夫。一翼、色の
虚籠を炙らせるねに成らうを夫に勧める。夫を修好
の四元にを許す。其修好は夫と共に紙服して貧者人の
み集まる所へ用足しに行く。四月二日を期すして之を諦す。
途中から行きつく迄、行きつゝいてこゝら降る色に虚籠
を宣する作者なり。始うに心持一番の実に
達し。帰来夫婦共に同じて島の乳酪を食べ
や夫婦共に。四月、恍然としんわめます。

立春　春浅　冴返　暖　麗　永日　春日　春寒　春雨
春暮　春待　紀元節　二日灸　午初　春耶麻

(9)
兄弟場にあるお祭りを御覧ぐとふる実をつゝく
(1)二人の兵隊の見る円陣をする者。(2)二人の見に中を見ふる
(3)新ふる

(10)
私に恨みある者二人　(1)仲悪しき友を指さ(2)その者で私を
書つゞける板の出来さる　(3)二人の私情の決する時につれて書風
とくるる　(4)名私の墓を割代と立て。名ゐめに甲のもを
あつく石ら拝ふう

出代や幼ごゝろに物あはれ
着たふれの京を見に出る御忌詣
薪能月は八島の十四日

風花　盛儿
子蕾

釋迦　涅槃
会　御忌
彼岸　水取
針供養　其角忌
寒食　薪能
ふこらい　出代
入峰　蜂
雛

市中や馬にかけゆく風
乗物で優婆夷も来るや御身拭
朝顔を思ひ出草や種の物　　涼

○Emilia (Sanchia Bellonii) 詩人天才. Petrarca が若い頃 Laura ヘ捧ぐ
ソネット。Emilia, Wilfrid ハ共ニ尼ヲメイ
○Wilfrid (Pole M) 接待家ナリ. Charlotte トカワセト Europe ヒテ死ニモおうス. Emilia
ヲ愛スル仕事ニドウサキメナリアルハナシトナリ
デ又あヲ戻ス。W. ハ C. トmarriageシテ死ヒ
ウタ Bellonii ハ小さニ失ヒスベ。其アトハ Coronation ニマタ "レロイカ" ヲ
あめノトがかし手伝ハ死ヒ度がアリナバ。Bellonii "天ヒヒテ死ヒ" ナル。
まがこれに。
○Pole (W. 氏) Mrs. Chump ヲ妻ニセントスル。Chump
が重ヲ捨ツタ故ニ。所ノ女ハ客ヒ ヒテ決ヒ ハノタニ ヒントスルノデアル
○Cornelia (Pole ノ妹) ト Barnet (のちの Cranio ト. 又ガ男ヒ妻デ Wilfrid ヒ
のmaintナラヲ尼) ノ love.

曲水　夕汐　種蒔　草摘　野遊　合鶏　紙鳶　身拭　生壬　踏青　身拭　日水
畑打　千汐　蒔種　摘草　遊野　鶏合　紙鳶　身拭　壬生　青踏　身拭　水の二

白魚や海苦ほ下部のかい合せ。
うしろより雨の迫くる焼野哉
長崎に住みて久しき絵踏かな　　其角

格大堂

「さあはこちらへ」「さあのよろこ」「えれやすとゆ申来るんかやらるる
ん」「おし」「いいのらはらんちさん」「すゝまうこ」
○えも餅を食つてゐる

アラシテ安か風雲に捲れ一人学ひと
玉つてゐる

駅に殺ぶ三年あの。一年は生の殺。一年は生よの殺。

虚実　鴈風呂　接木　茶摘　菊根分　上り魚
絵踏　草餅　鯛釣　青饅　海苦　目刺　野焼

かげろふやほろ〳〵落る岸の砂
鶏の子の嘴よこしけり春の雨　士
温泉の町や煙の中の春の月　維
　　森　芳
　　々駒

一。記。金お。伝お。の不足。月並を嫌ふ
。子。母子とす。外とも。金う子人を厭ふ。月並を嫌ふ
。記。自分のふの条にのらず。えを自分の条にのる様にせん
とす。子供の行儀と心ゆとを子供のすうめすうみ
とする。子供えに化粧さんで対を後らずとよ。記
ハ対産をいてゆちもきもと心ゆるの故に立を思考に
すれどもおはでも自性にあるでしと思ふ。記はは思ふある
のなに近覚会教もあくお伝をいがめる。子供はまに孝
と第義務のなにえに報恩す。金は対産を後るといふあいとつ

雪殘　京風　春風　霞　陽炎　雨春　別れ霜
春の月　初雷　苗代　温む水　水の春　猫の恋

鹿落角　鳥入雲　頬擦　鳥巣　鷺祭　鳥尾鑑　燕鷺　雲雀　雉鳴　鶴駒　鳥鶯　雀鳥　子雀
る交

てる供は廃物として捨る。父は唖然として自失す。

鶯や下駄の歯につく小田の土　凡兆
鳴りや野は薄月のさしながら　香蝶
馬市や人の中飛ぶ燕　墨山光

二。子供は母を去で、小さ子因縁とする。母をみを失って金の金
味を知る。子はあに帰りたい。父母はみを帰したい。然し
一さび割うんこるものもめるともする能はず

●三米のわ史を馬・無にして色々史法をいってうらうのお。！
……一番校にはとのりあ。ある「ばお」とあって呪めつける。
此「ばお」に遊る子

橋渡る人にしづまる蛙かな
たはれ来よ袂に入れん飛ぶ胡蝶
首あげて人なつかしの蟹かな

紅梅涼
緑萇苑

(一)甲ノ心ニ対スル不平 (二)乙ノ甲ニ対スル不平
(三)両人ノ合体登第 (四)登第ノ解決

○宴会裏庭
○合歓花咲
○カリ。魚ヲ放ス
冬ニ魚ヲ飼フ
ヨキワケ

ふるの大木 ゴトトコロ 元竹

1) ank dancedwith Modaffodils.
2) Smiteline
3) Hanyfut-redlips

Yukkuri.
有教ヲカク。
あの山ニ向ヒテ立ニ手ヲ向ヒテ立ツ。
To-morrow.

○Wordsworth の Anatomy of Acting ヤ = automatism の Genuine feeling ヲセズニ ヲヲ ヲ/ヲ
(Ki/Smithchion, 1844ヲ)

宴会ニテ humour ヤ 新作 ○ が外ノ人ヤ 異人ヲ面白ク
Cornelia Corkin ガ自分ノ学校ノ
昨日ハ表先ヤモノヤ
16ヲ過ル色ヲ行キ方ガ良シ。文ハ表ヲヲヒニサガ"ス。ヲ

鳴魚く　若鮎
柳　駝鳥　初鰹　鰹鳥　田鳥　鶏冠草　蛇出穴　白魚
柳　櫻　鯛　蝶　蜂　紅　蜻蛉
梅紅　梅　虫居寄　員櫻　朝　森田子　櫻
藤　花梨　栄海　花梅楊　杏　李

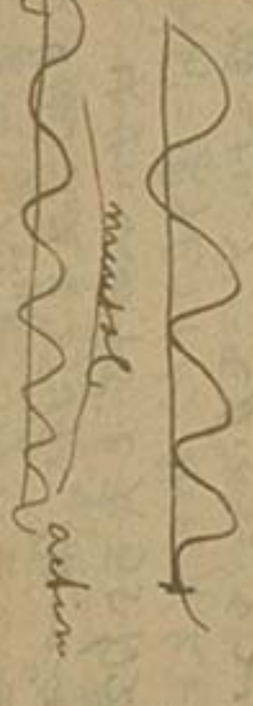
のリ。ルハ 吹ヲ ヲ ヲ

鶯の笠おとしたる椿かな
五年みゐ故郷のさまや桃の花
春水の南し北す柳かな

芭蕉
維駒
把栗

Short Analyticus Posterior — Mochiki sleep no mori
Sound, interpretation
Coleridge, 集
mere mere

Work of Conciousness



辛夷　木蓮　翹連　躑躅　桃　椿　花曜　花楷
木瓜花　長春花　花丁沈　花木醉馬　柳　茅木

落の芽や梅を尋る一つづき　浜太
山吹を腕さしこんで折にけり　化
鉢植の百本松の緑かな　碧梧桐

Comrade Youth　角に吹きつけられて。

Ideal of Darkness. 蕃地へ行つた新聞屋。

船ハ大きいが、ソコヘ Kun ト言フ人ガ乗込ミ、乗客ヲ集メテ、新聞ヲ売ル。若人ハ、牧師ヲ、マリカイテ、ウレしい。

Ideal of 広い Fruitless

ヲ知ラズ。ソノ所ハ新聞ヲ売ラテ食ルノ。ソレハ、ヨルメニ明ガ、ヒロ〜フリヲシテ、30ヲ過ギタ、新聞屋ヤシタ

うぐひすやわづかに咲る岸の花　其角
菜の花に春行水の光かな　召波
山遠き霞が浦や青の角　四方太

梦

(一) 女がるいあるの珠をなげる。男は受ける。男の手に絵てゐる。
比珠を手で受けとめなげ返す。
(二) 女が死んで仏界へ行く。男が泣くと。男が死んでゐる。女がとめる。次に女が又死んでゐる。男が死んでゐる。
女の女が死を悲んでゐる。男が死んでゐる。
(三) 阿蘇のうしろの中

花の菜　大根花　豆の花　芦芽　芽草名　若草
下崩　若草　水草生る　岸　蕨　土筆　蕨

日の間やにがれて暑き牛の舌　正秀
短夜やいとま給はるしら拍子　無村
矢車に朝風強き幟かな　雪鳴

立夏　京　夏瀧　佛　土用　川　秋近　蒲菖　幟　短夜　蒲湯　日盛　玉藻　炎天　馬競　旱　植田　暑

プロスペラスナル人トミゼラブルナル人。甲ノ得意トセ
失意。双互ノインターアクション。
ル十人ノ妻ノ心ノ。ミゼラブ

○

メ日を捨て月と共。月を重ねて年となる。年を異んで世
となる。
メ多の故に神を信ぜざる。
メ己を伝ずる故に神を信ぜず
メ妻夫世界のうち自己をうきよとし

月鉢や見の額の薄雪　賢
十五から列卒にさいる、照射鼓　召
夏晴して佛の麓を忍びけり　碧梧桐

×自を学しと思ひあるものはぬ誘あり
×自をすて、神に生るものは神のぬ誘あり。神のぬ誘う
らは死ぬる後なり。況んや他の所にある人々のぬ誘をや
×浮世は陸鉄のみ、ろくと然と家と向とのみ。唯来あり
て実は一瞬を暗き世にうくく。未来まるものはなし。
×未来に歩きを死はず。未来に黄金の天地を待おして点
内通の世に住せんとは現世に一寸の錦を飾るにしず。一寸
の金をあつむるにしず。美と美と真のうさを一分〻〻
とするあるにしず、一寸の地を換るにしず。
寂滅為楽の世界にまるいは寸世を一寸〻〻とし点が喜ま

矢数祭　照射祭鶴　鶴川練供養　狩川祭　書夏米施　除夏水打　会園井し晒

を要くにしず。一個半個の犬を捜ち殺すにしず。
・それは生を立ちる。生を立てるとはそが喜ばの滅度を喜味
昏に暮つ。見の寸いみかな　凡董
夏痩や朝夕の食ごのみ　格三堂
夏朝や故郷を望む舟の中

生るは分に好きの値段なるあり

○若イ男ノ[illegible]・[illegible]
[illegible]
○[illegible]
月コニ[illegible]カ[illegible]。[illegible]人ハ[illegible]ズトル・[illegible]
○死ぬ[illegible]。死ぬ[illegible]。（考ラ

雨乞夏　雹夏　行水汗　富士詣御祓　納涼夏衣　涼袷　船遊浴衣　蓆書羅　虫干夏帽

○ Nash の anatomy of absurdity ヲ見ヨ

つりそめて蚊屋の匂ひや二三日　浜化
蝿帽や来る夫のむせぶ蚊遣哉　太五
掛香や再び人の妻となり　城碵

○黙者をして楽せしむるは汝の正義に背くなり
陋者をして●傷らしむるは世の幸福に背くなり
愚者をして狂ならしむるは世の智慧に背くなり
富者をして怠ならしむるは世の学徒に背くなり
権者をして●ならしむるは世の道義に背くなり
黙者をして其口を閉ぢしめよ
陋者をして其陋に敗れしめよ

夏座敷　瀬殿　青簾　香拱　鵜　蚊遣　蚊帳
扇風扇　竹婦人　鞭　日傘　新茶　蝿　梅干

愚者をして其愚に徴りしめよ
富者をして其富を誇らしめよ（髮洗ひ）
権者をして其権に乗ぜしめよ（冬の夜に落ちたり）

凡道光
月雨立
雨鬼史

弘多は甚利害を用ゆるを倉名とす、其失敗
歇はる。是天下の笑ひなり。●幸もの〻ゆるを思之
を奈何ともする能はず。百年の後年鳥鼻口
に入らず、酸肉腐爛して鬱積雨を盛つを待つ
て吾立の後ら田ざるを見れの〻
吾は日本の人なり、天下の民なり。日本を救げん立りを容れ
ずんば天下に行のん。天下を救げて五を容れずんば

甘酒　梅雨　水飯　心太　葛水　振水　沖論　生節
月雨　月玉　夕立　雷　青嵐　薫風　夏の月

の恥たる後る。

一人の用ゐきを妻へず。巴や鼻井桁きを恥づ

妻子たきを妻へずに、陋きるを恥づ

父母兄弟たきを妻へずに曲れるを恥づ

それはそれなり、用なきあらず、妻子もあらず、

父母兄弟もあらず。それはそれまる分何者ぞ

をれんわ。それ人を曲げずんば人道に我を曲げん

とす。両者曲げざる所、両者は死するべき運命

を有す。運命はそれのみすとも能はざるあり

それ人を曲げざるに何者か来つてそれを曲げんと

する者ぞ。全世界の富と全世界の権と全世界の

巴や木の間の角樽 鹿の子 峰の雲 野夏 鳥時 山夏 鳥古閑 川夏 鷺老 田青 鳥抜羽 水清 翠翡 海夏 鶴

蓮なる清水に繋つめたき

恥づ 更 知らんとして 乱 恥づ 更 恥づ

笑をなすもそれを曲げざるの理あるべからず。

つかむ手の裏を遊ぶたかなはしたり尾の錦を動く金魚

それを曲げざるの義侠業はなは世界の櫻の栴檀の長兎面より清

えてなるべし。

○若の人はこを云ふよとふ。人の人はもを云る、

ふとふ。二ふ的中これの意識をいえ居す。なにニ

ふ的中大半のなおしの

○人に向つて云ふそれ人に恥づるの行ゐ

ゆ人は何者の行ゐあまり

○英人の勇猛なる者は矢張りそれを難ずるの nice 子。

そなるも実は lain 子。ふ例。ふ例。ふ例

青 金魚 水 鶴 鯨 初鰹 雨 蛙 蛇の衣 春 火取虫 子の鳴 浮 巣 行 手 蝸牛 蛙

Henley 氏ノ R. L. Stevenson ヘ self-consciousness ヲ去ロシメタリノ Joke ナリ

self-consciousness の弊は individuality をなすべきを妨ぐるを以てなり。我国民は individuality を失ひたるの弊あり。個人の長所を発揮せしめざるべからず。

短夜や毛虫の上に露の玉　蕉

牧牛の子の笛や須磨の海人の手水鉢　子規村

牧牛の子の笛や、須磨の海人の手水鉢と名づくべきに牧牛の子の笛を吹くの人を以て名づくべきに牧牛の子の笛を吹くの人を以て名づくべきに牧牛の子の笛を吹くの人を以て

英国人は決傾向にもとづくスルぬめに陸とそのものを非者に重んずる（舟引の唱歌が合歓の蛇）（妻の花）（千）（那）（山）（樹）（花子）（梅）（常）（貧世帯柘榴の花も見飽きたり）（花）（の）（た）
き所とす。日曜ごとに平らもし寄りに来客にあせず。
彼等はされにあらざれば神経を沈静する能はざる為。
他日もし神経衰弱のあめに滅亡する国あらば英（若）（榴）（柳）（葉）（緑）（花）（茂）（葉）（夏）（立木）（木）（閣下）（日）（百）（柳）（夏）（動）（花）（歌）（合）（花）（緑）（川）
国は正に第一に左るべし。
彼等のコノ傾向は彼等の近世文学を見て推するを知るべし。
[illegible]
遂ず人多はたい神経のカタマリ、ウルサキ刺激ヲ受クル動物、怪奇なる。
[illegible]機に応ずる器械、ならんを知るべし。

（常）（盤）（木）（芭）（蕉）
（桑）（実）（柳）（実）（櫻）（子）（規）
（落）（葉）
（若）（楓）
（林）（檎）
（梅）（実）
（早）（桃）
（杏）（実）
（筍）
（若）（竹）
（枇）（杷）
（生）（胡）（桃）
（竹）（皮）（散）（る）

ものコ[illegible]ものみなり。キワドクなるのみなり。
神経衰弱の用や他き時の輪のことばかりする。芭蕉
[illegible]ノ作を見よ。（盤に松魚生きの子規）の代[illegible]よ。

彼等の病的なるは自然の刺激を以て満足する能はず。
人為的に比等の刺激を創造して快ありとす。是ゆ
ゑ日本人は比病的なる英人を笑んで自ら病的なるを
ならず。なんで自殺を逃ぐるにひとし。英の
女皇既に創ありと已をはずドッグ、コラーを飼ゆ
宮庭の女官皆之に倣ひ左の日本人は決女官の
流なり。

○美人のみまは為度をもみるの文字にあらず新徴をもみるの文字にあり。（黄色なる匂もきの人の中に）廉（くさき）なる人の住まする所の文字にあり。（紫陽花を以て人の文字とす）。この女は自らずして美人を以て絶えずの文字にあり。

花櫚棱　薔薇　芭蕉巻葉　美人草　紫陽花　炎　葵菊　芍薬　牡丹　花茨　花栗鼠

薬剤師の花園を一都とする所の文字にあり。

○師をもりけるようは本テニヤンアリケーにて為ポテンヒアリケーは何に為把する為食らちい。師多じて新とするとき アラケ井ケーとする。アラケ井ケーは変なる為に弘られたる。其表紙を表紙する。美紙なるを初めする。第四の文字は

千撫　竹石　葵蜀　炎　花陽紫　草人美　葉巻蕉芭

此新のもの多くして大きものなり。俳優なるものなり。

（井の中に遠々清しかきつばた　牛蒡）

性の美に寄多者是国（清）に出でくさ花せるなるものなり。

（畫顔に石切の茶の煮立ちけり　紫人）

中若切りの文字は哀れの文字にあらず。

天下に英国人程に慢する国民なし。世人は支那人を

に慢とまるの文字人は春名の松唐物なるなり。

美人は又しかうの松、中若切り流に他国人を紅

慕して自ら一番利口と信じて居るなり。神経

弱の神経に有要せる病的の徴候なり。

釣鐘草　顔畫　夕顔　紅花　糸瓜花　十薬　凌霄花　杜若　花綿織　合百　球實擬　菊夏　綿の花

○文学士の洋服は八円位

○年上美人何度逢ふの嬉しく思ふ。仕舞ひ一トりあるあとつけて。せめ

汁をすすり流れを越す水にさそはるゝ　澤や樋な　香空　鶴

○生れるは誰れも嬉しく思ふ。

○死ぬるは誰れも悲しく思ふ。

○どうして過ごすべきか。

○どうして過ごすべきか。

○どうしてもこの世に生まれてきたのだから。

○どうしてもこの世に生まれてきたのだから。

○死のこれがあるとこの世に生まれてきたのだから。

花芭蕉　澤潟

葛の花　蓮

風鬼　菱花

花蒲　草水

一八　蒲穂

河骨　蘭花

36　12月

○今の世の人は瓜の匂ひを嗅ぎ分ける。ソリヤ美人。

卯月　○にや誰ともわかして咲たる　卯月　○ドクリしてこの頃　二十八天　卯月　○エヘヘ

幾度の枕　瓜の匂ひ　卯月　卯月　卯月　卯月　卯月　卯月　卯月　卯月

○信りと会を過ごすべきか。

○死ぬるは幸福である。

○之を苦とする者は神経衰弱である。

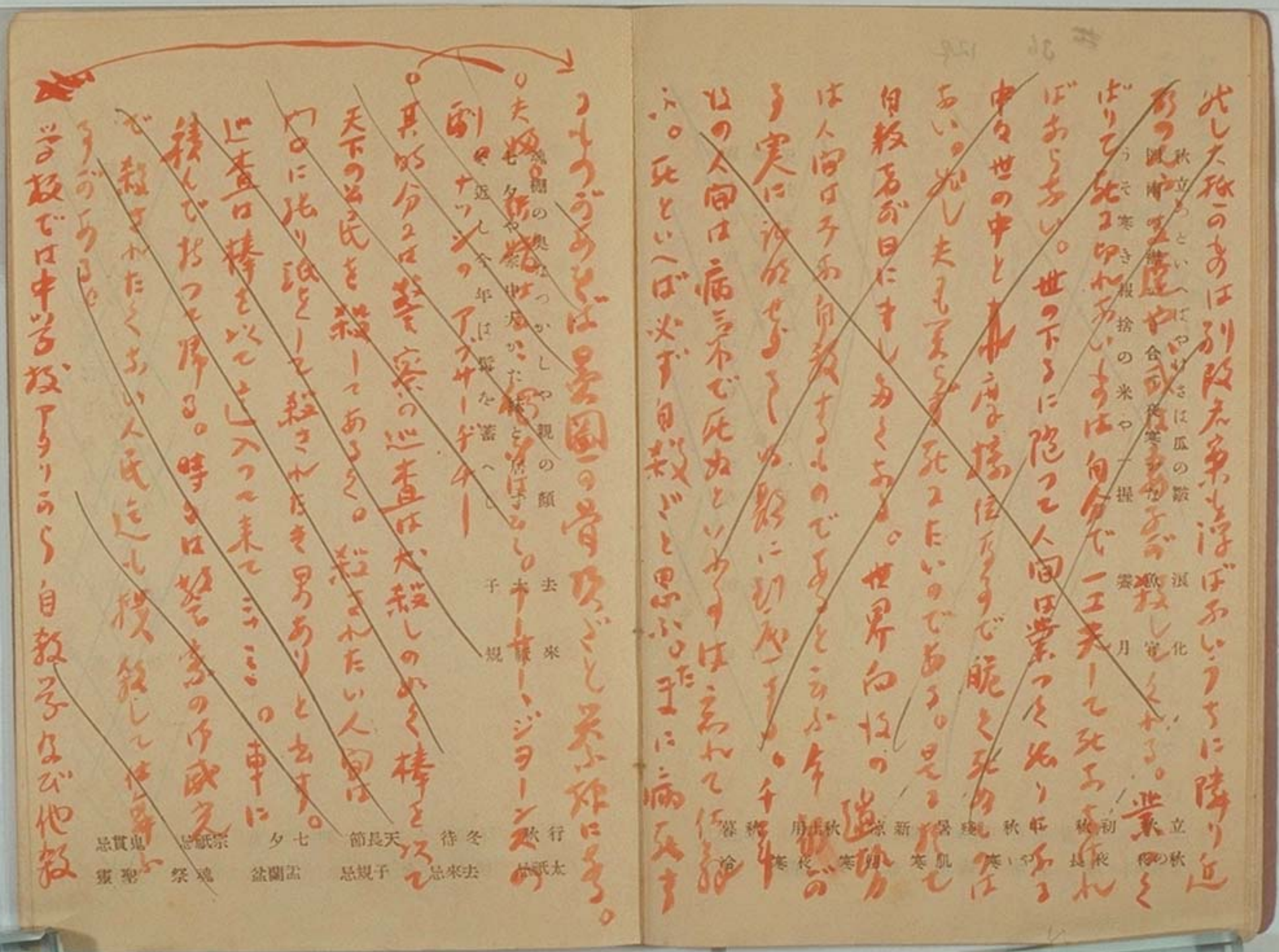
○死ぬるは嬉しい。

○死ぬるは悲しい。

○死ぬるは苦しい。

○死ぬるは苦しい。

○死ぬるは苦



秋立つといへばやがさは瓜の跡
合歓花寒き雨捨の米や
一揆
涙
雲
化
月宮

立秋
秋の
初秋
長夜
秋
秋の
寒い
昏睡
寒肌
新
寒
秋
月
寒夜
暮秋
冷

冬待
去来忌
天
節
子規忌
七夕
盆
太
紙
行
秋

鬼貫忌
霜
紙
宗
祭
鬼
聖

学者倫理の代りに教（こう。めにまにおやぢやお
貸 佛 見 ふるわ 月 花 ふ 閑 夜 涼 墨し 角 力 花 ふ 涼 菊 苑
学 教 氷 楼 月待ち 同 は 花 火 ふ 閑 夜 涼 面 坊 菊 苑
に不便である。

○パーソナリチーの世の中である。古来の大自分を
りつめて、はちゆれる 待りにして生きて行く世
中となる。若は夫婦を異体日心と呼ぶ
パーソナリチーの著述した多日たんふ、プリエ
ヴェネ実のあるべきもの。細は勇、夫婦
裁判として水と油の如く区別がある。
其パーソナリチーを説き

墓 参 迎 火 送 火 火 花 待 撫 子 燈 篭 生 勇 走 燈 提 灯
市 草 踊 盆 餓 施 撫 肩 撫 撫 撫 撫 撫 撫 撫 撫 撫 撫

文明の陶冶に於ける訳である。れうで
ある。迎 暮を待つ菊も暮あふ九日か
露 月 葉 化
我庭の男や縁する隣あり
元世界に於ける人性に皆くとをひしく
元来人間はパーソナリチーの動物であって
此接光の文明の論事である以上は当然
此個人を実行する人は皆野蛮の
である。夫婦間に情とふ事は野蛮の代
にたつて造物である。更に成長
実行すべからざる傾向である。嫁、姑の
太古蒙昧の時代に日月しくる如く夫
婦の同居する人数の実である。

入 酒 菊 祭 祇 地 市 の 柄 迎 駒 社 秋 陽 東 見 毛 吹 鳩 虫 送 縁 撫
打 蹴 海 鞠 の 後

一歩を進めて論ずれば結婚其ものの野蛮
である。やぶれ鉄やいさゝかながらことし綿山子渡ナリ丹一巻と言んで
世に第二傾城近の人の尚顔の蔭直堀上の沢宮の裾
を以て迎ひされべき自由のあい。は下の理
廣の謂前世の遺
れと迎失敗に終るのである　石　竹　堀　引
云こ

○ニトニカ月ト丸トハ乃世倫理ヲ知テアル。若ハサウモ船番綿綿蒔櫻火菊蔵堀刻
ムラナカラヲ。キマラヌ所ニ面白味ガアツタ。彼は行テモ乞ノ乞エヌ
ありがたこゞ
○ニイチェは Superman ヲ迎フ、バーナード、ショーモ Superman ヲ迎フ
Superman モ Superman ヲ迎フ。此事丹前の Superman ヲ
此ものノ人ノ hero ヲトリハ Hero ガ Hero ヲ歌ひ、Hero Hero ニ男武ノ歌フトハ全

子鳴子山案船番綿綿蒔櫻火菊蔵堀刻
り釣魚沙筍鹿扇拾別の蜻蛉蔭蔵板引

此ハ男ニ人。現代ハパーソナリチーの為ん丈般脈ス世ヲ所シテ
自由の世界ヲ。潮ハ流ハ紫ハ紫ハ紫

なり。一歩の一進ムベカラザル休ス。の星に於テ彼等ハ此一歩の一歩ヲ進ムベカラザルなり。自然ノ法則ニ向テ上ニ試むる代りに天文の上に試みるなり。月見せん伏見の堤の拾郭ヲ流ル人ハ宗教ヲ以テ来リ理ヲ以テ去ル。我レ此世界ノ無数の星辰ハ無数の人ハ無数の世界ニ無数ノ人ハ無数ノ世界ニ無数ノ人ハ無数ノ世界ニ無数ノ人ハ無数ノ

○ analysis of language

analysis of language is a process of breaking up a sentence into its ultimate elements

○ Improvement of funeils. once started in the way of improvement funeils, they can never go back like the day. have finished schooling their infancy in funeil in improvement, and start in another direction,

○ Bell rang the King ...
大漢和辞典。[illegible]

○ Draw error — (1) ... (2) God's kind of the world ... (4) [illegible] in the high. (3) young man (5) old man.

珍月秋竹溪頑

花野初渡鳴落し水ちぎれ
屋勝り
田刈水し落雁雁鳴
蛤鴛鴦
水の秋鶴白眼
鹿
雀山
鳥ふひ

鮪釣る頃もあるらし鱸つり
喘度に草の露ちる鶉かな
渡り鳥来たり東の國の端
牛
愚
殘
蔵文

○昔は市山の市威光あり今でも未だ世の中あり
○今は市の市威光でも出来ぬ世の中なり
○次は市山の市威光でのみ出来ぬと云ふ時代の来るべし。
威光を出すに若干の手段を用ひ過ぎ徒個人を侮辱するしるまあ
ければ止りの個人と個人の間より刃がきるし市上の威光
とすると雖も侮辱するものあるべし。ハーソナリチの
世ならば今の今の大勢あればなり。故に現代に
市山の威光をいたに若干多勢をたのみにしまずを成さん
とするものは カゴに乗って楽をしても早く去らんと企ふす
るべし。

鶏鳥椋鳥木塚白頬鶴鶴鶴雀稲鵙
鮎落鱸鹿河る入に穴蛇燕歸鳥り渡

海士の屋は小海老にまじるいとゞ哀
まつむしやともし火青き四の壁　蟬野　三井芭蕉
襲へりて銭無き旅や秋の蟬　　　

学校の流行歌あし。カノ蕾徹の作品の意味は一時の浮説にも
怪怪として三葉紅葉を割り越柿紅葉失しなひ行く割ひ咱地の桐の花の咲きを見るに丸山氏の句を見しむ光の葉の句あり。曙
トニフ〜ケ月の中先に上野二つの銀杏の落葉二十世紀に在在蜜柑とすれば人は
如ず瑞仮名とあり流樹的とする。巧つべし。
は幹をあるはたとえ千の面森あり。万のれるあり。侵心の紅色芭蕉
ありともめりともす紅けず。只い金世界を二十世紀の海底に映柳
めて立素の白えんを爽印しく後日光に赤曙して乾ける
ちゃ、めにらいにたし。
○天子の威光ありとも家庭に立ち入りて故おきに夫婦を離間
まを許さず。故おきに記子の情合を殺ぐを許さず。
しし天子の威光ありとて之に言従する夫あらば之に言従する
妻あらば、是人格を之蔑てるものあり。夫より易し。
おくるの資格あるものあり。紫紅と色比暴虐を擅まく

柿実　撥の実　紅葉　木名の葉　紅葉落葉　銀杏の葉　芭蕉の実　柳散る　梅の実　桐一葉　椿花　蜜柑の実

する権威あるべからず。況んや二十世紀をあてをや。況んや一個人
をや。況や金満国家をや。況んや妻を夫馬にしをや。
況んや瑞仮名をや。況んや黒のしのぶ妻戸後
況んや瑞仮名をや。況んや黒のしの貴な吹き鳴らす　召波　露月

天は必ず之を罰せずして止まず。天を罰するは此迫害を受
けたる人のまを借りて罰せしめざるのみならず。是人の迷ふ
明を以て手本に わかりて一緒一意もしうゆべからざる迷ふ

○A、考ふるに自己は A より
○B氏 A に云ふ君は(い)ます
○A 脇せずもつて、C に云はく君は(い)ます
○A 犯脇せず今なほ の こ わ く。曰く妻節(い)ます
○A 書生として E に わく。E 冷ゝとして曰く(い)
○A、E をもつて 推り考ふ。今一遍子に耳いて見るべしと。曰
子に わく。子笑つて曰く(い)に 極まつてゐる。

実榎　実楊　楊　実椿　実杏銀　実烏犀　実南瓜
栗　柿渋　柿　実木　実檀籠　実角皂　実天瓜

○Aクレテミトナン　慨然。悄然

物干に延び立て　九年母や仕持落ちて早五年　惟然

鐵鉢に雪盛りたる明烏　太祇

critical moment 哭す　涼菟

○小供ノイタヅラ。蜻蛉ヲ殺ス。血ヲ見ル。　茶村

○七月廿九日

▽ All that mountain about him, like Terraces of huge petrified waves, the black ravine on the side of the cliffs, the luminosity of the blue rails, the brilliant flowers of the dawn, the depths of the chasses, distributed him, and a warm of desolation swept over him at the spectacle of the desert, which, in the up heavals of its surface formed amphitheatres and ruined palaces.

梨　栗　柚　柘榴　蜜柑　金柑　九年母　橙
佛手柑　ざぼん　無花果　桃　木瓜の実

身の上をたゞしほれけり女郎花　涼菟
朝顔も実勝になりぬ破れ垣　太祇
墓掃除つまくれなゐの盛りかな　寒樓

△汝ノ見ラは利害の世界。ふんの立は死不世界。汝ノ見ラは実在界。ふんの立は空界。
世ラ。人殺——天殺。業殺——公殺。得失——美醜。——、

○お引ヨえん婆ア女。父ニ子ノ死ヲ殺ス　榎槇　栖鳳

○(一)友人病苦零丁。遂ニ死ス。(二)遂ニ三ヨリ報ヲモラウシテ其ノ翌日ニ行ク。父母其ノ死ヲ知ラズ。翌ヲ二日下リ沖ニ出テ石塔ヲトキ、来ル。其ヲ死ヲ知ラセル。ルヲ書ニテ知レテ。世ヲ去ニテ。ヲ卒業。　萩　朝顔　女郎花　男郎花　実の蓮　竹の秋
花仙風

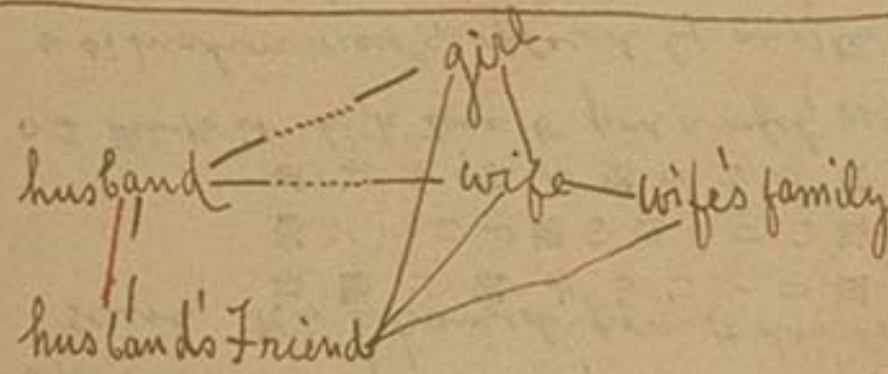
○夜ノ発ヲカラ。見ヲヒキトル。ヒキトラ。ヒキトラ。アロラ。支ヲフコーヤンデ死ネナイ。　A死ス

○Aトんみ二度死ラ。B十ん母ニヲ看護ス。Aドハいc=終ラ。C=
当月ノ為メニ日ヲ見ノ為メニ。ヒ常ニ心配スレモ当ノ為メニ。ヒ常ニ心配ス。ヒ角ヲ考ヘテ作ル。

o crust on crust. The glory of the spirit is hidden deep under the hard skin. a crisis arrives — a crisis which calls on the free and active play of the ~~essential qualities~~ of the mind, — a crisis in which a mere must, will or nill, burst open the hard shell and the hitherto unknown (unknown to the possessor as well as to observers) faculty of the mind in its quintessential rage and fury. ~~the~~ then and then alone, he recognises self — self in its nudity, in full glory of its spiritual significance. Alas! The crisis causes more than a flaw, more than a crack. It often results in breaking the mind in pieces, both the coating & kernel together. Would that it were the hard skin only that was burst, thus allowing the inner light shed its iridescent rays around, bathing the darkness which surrounds the owner with heavenly hues.

o A world of woes, a world of rage, and a world of temptation

Besieged by the world, ~~the~~ world of misery, wickedness, & its lowest phases ~~of wickedness~~. Evil Spirits howl around vying with each other to subdue the godly man. ~~Suddenly~~ a way made for him, made by the cunning hand of the devil, forward they say. The man slowly rises, looks at the way which seemingly leads him to a place all but ~~[illegible]~~ miserably, he scornfully turns his back, plunges at once into the storm, which rages round him, "Fight and conquer!" says he. His voice is ~~lost~~ drowned among the wind & rain.



o Friend's pretension is to find (.....) for g. & W.

o 7's real object is to step into H's shoes.

o 7 uses every means all but fair & candid. Subjects H to every sort of insinuation

o The gaps between H & G, H & W become wider & wider.

o ~~Otherwise~~ Ignorant of the artifice G & H. treat

7. only, + has a course to every possible ● underhand weapons.
○ H shuts himself up in his shut room. Disgust is H's feeling. 7 laughs at his secrets, N is estranged from H day by day.

打櫂に船だけ一ニ蘆の花　澤桔梗
咲でうれし墓のほとりの草の花　菱沼
鬼灯や引き殘されし垣根草　波静湖化

○ 7 thinks it high time to find a safety value for H, in the shape of a diversion nearly offered by another friend. His machinations to secure him the position, now occupied by 7.
○ All the parties concerned are deceived by this single artful man 7.
○ H stood against the offer. 4 elle is shortlived. 7's plot is revealed,
+ ~~[illegible]~~ he is brought into disgrace again,
○ The wound caused by the mischievous trick of a sophistic man lasts as long as the parties ● live.
○ Punishment and retribution are in 7, Y, N, + H.
○ H is killed but with a clean conscience.

H. spits up his face. Contain falls

種の穂の馬逸したる景色哉　越人
俵して蔵め蓄へ蕎麦の穂　鶴渓
家近く岡穂植たり稗交り　水村

菊引間　藤実蓮　ぶ飛実ぶ　蕎忘　萩の実　稗　稲　粱　陸瘡
唐辛子　芋　零餘子　于　草の実　紫蘇実

澤桔梗　菖蒲　沸　草紅葉　荷　花の芋　蒲菊花　末枯　敗荷　草草　秋草　鬼灯　煙草　生姜

己が葉に片尻かけて弧
唐櫃の北山戻るきのかな
椿田や痩せて慈姑のこ
花一つ

涼子

菟絲子

落穂　新藷　蕎　栗　稗　黍　唐黍　冬瓜　夕顔の實
弧　糸瓜　南瓜　烏瓜　枝豆　刀豆　種麻　苗

から鮭も空也の痩も寒の内
初冬や日和になりし京はづれ
のび〳〵し鰤り詣でや小六月

芭蕉子

蕪村

立冬　冬初　小春　待春　除夜　暮の年　小寒
大寒　入の寒　内の寒　大三十日　短日　冬日

みちばたに多賀の鳥居の寒さかな　尚白
冬ざれやきたなき川の夕がらす　定雅
片岡のぜも刈るや神の留守　青々

霜夜　忌磨鉢叩
夜冬　十夜猪支
寒　諸命お　忌摩耶
凍　夷諸　名佛御
る　越取お　忌蕉芭
冴　空也空　忌雪嵐
る　氷　れざ冬
スマスリク　樂神　焼火御　祭革吹　族の神

渋柿をながめて通る十夜かな　拳花
寂て聞て西へ過けり十はちかな　佳
二貫目の蠟燭とりすおり叩　道則
講かな　笠

門前の小家もあそぶ冬至哉　凡兆
百足は握る使や衣くばり　召波
年越に蕎麦打つ家の習ひかな　牛歩

忌籠凡　忌村蕪　雑魚雑　市の酒　八朧　冬至
市の年　節分　枕銀　厄拂ひ　季節　候　衣配

唇の墨はいつから冬籠　涼
慰びらきや扶の香守る人の顔　霞
北の窓日本海を塞ざけり　子
　　　

「スリ」に扶ケ[illegible]ナシ。大デ世ガ渡レルナラン。天道様逆ラウ。
是ヨリ其頭ノ[illegible]方ヲ説明スベシ。種々アレモ悉ク
贅沢モ[illegible]無ク[illegible]作ルナシ[illegible]ト云フベシ。涙化
今ハ故意変人ハ頭ヲ[illegible]ケテ其上ニ[illegible]ル人ハ嘲笑世ナリ。
昔ハ誤ツテ人ノ足ヲ踏ンダ上ニ、ワニノ涙世ナリ。

Poh's made
Kick

他人ナリ。ハイ名前丈ノ男デアル。二十世紀デ毒スラ他人ナリ。
ル男君。ーーーー他人ノカヲ借リニノ夫ニ[illegible]ル男ニアラズ
下女ナゴロツキ生ノ補助ヲカリル男君。ナカウドの威光ヲカリ
。親ノ威光ヲ借リル男君。更ニ、威光ヲ借リル男。

Abraham lay wight his forty wives, Judah wight his daughter-in-law, Simeon wight his sisters, Lot wight his daughters.

[illegible]

年	桃	岡	見	煤	掃	餅	搗	掛	乞	年	忘
雪	舟	雪	香	び	脳	霜	や	け	洟	水	歳
暮	邪	風									

弱法師我門ゆるせ餅の札　其角
年わすれ書念者と若衆かな　青畦
土器に古き油やすい掃　青々

[illegible]

[illegible]

[illegible]

住つかぬ旅のこゝろや置火燵　芭蕉
勤行に起別れたる湯婆哉　太祇
酒を置いて老の涙の火桶かな　碧梧桐

火すでキノコの飛んでゐる

飛ぶ ちゝ。
ある男の電光記を去いものゞ。二十七歳の大西雲のおもし二階から
上と云ふ。世る幼に居ちし。あのちゝと思ひ七歳まで。
往せられる。次に男ある。形面上とは自分の物を指へて形面
形面上にあるを去べし。形面上を自分に物に任せられるまし。物に
去にあて巷屋の孤絶まで直ち。一体世界の交多とす。もし巷屋まで
ちゝつゝもそを去る絶対をなるとき第二の一体世界をなす。
自化ノ長侯任をなるとき始めて一体世界をなす。自化の長侯任す

喫茶（夏物）、恵比寿 大皇（冬物）（冬の物）（冬の物）

位 恵病院のうち あひに炬燵…さあてで大丈夫でゐんす。
脳や牛を洗おけ コロリやペストンにつゝるでゐんす。

懐炉 埋火　湯婆 安火　温石 懐炉　手炉 暖炉　火鉢 火箸　火箸 炭　火桶 炭桶

「さう、そんふやいた、わさし一人で行くのら」「わさし故郷へ行きたいの」
いのぶ ちさども。あすちは孤岳工飯。新を巷ちちゝ行けるのうらしやあの」
毛蒲團やこはい夢見る後夜の鐘　涼苑
閼守のゆふべかしこき頭巾哉　東季
抱琴

古会 古人の夢もなかりけり

「ゆ姉さま、ゆ姉に行きまゝうて」「えゝ」「どちへ行くの」「わさし。。さんのあへ行きた
るもも姉さつて」
「もえ姉さま」「巷」「あもでもえ姉ちのよ、え姉とします」「あんは う天しいのね。あ
「ゆ姉とさべさらえ姉としまそう」「あゝえ姉さつて、ねちさ丈」「ねちあのて、あゝえ
猫の一番の長いわ」「見猫ゐと長猫」「うゝの猫の陸あの」
「ゆ姉さまは猫のおきし」「えゝ」「どんお猫ゐすき」「どんあんいも」「わさし虎猫ゐすき、虎

「ポエーラソー」の就と猫美とはコンプレックス」「ポエーラソー、カフ」。
センデンシャン、カーヴ」でおまゝつてる。「ポエ、ポエ巷」のつ、「ポエ、ポエ」ではあゝはせまいサーヒス巷」
陸あ猫。「ゆ姉さまは猫よ。ちて巷を猫いてふくんゐ巷もどうもふゐ巷ね」「ドン」

どちらもんのちゐんちきりんを ゆいてゆ
ゆいて巷つて 巷ちさい人がある。
金や大巷でわー、巷みつ巷みつ三巷ゆと あんをも金やた巷で、どし
さつ今まゐらない片祇屋ようそごものひ。 どんどちらもんのちゐんちきりん
置さいてわー、 くどい猫ごう、ようきうしゐんせ、怪巷で云ふ巷まちごと、一人でさし
花月巷
白いりボンのハイカラ頭、来るは白粉まハ々猫ヴァイオリン、半ちの夫巷でぺうくとのうきゐ。

袋手 巻襟 袋外 服冬 綿入 綿帽 炭助 取朝 炭冬
袋 蒲團 羽織 革 袋足 子帽 巾頭 抱琴

交は紙衣のきれを譲りけり　丈草
薬喰おぼつかなさに人さそふ　凡兆
俳諧の堂に入りけり納豆汁　月兎

けとあいてある。
と思って見ると ペストの豫防としても犬に猫を飼おかいと
地方の医者教師おすもの豫防のものありますよ。ペスト豫防法おとるこのらどんあるすぶのついてあるう
ました
院に入りました。さうしたら医者のあんまりいい犬でもないからこの院料をまけて上げますとこれ
もまけて居る犬を出すおとゝ思ふ物騒きうけう来たいとゝ思ります。夫で仕方がないから又病
を盛って殺してくれとゝ思ひました。医者が私はとても動物虐待癖止会会員であつて気しく
らない・おって置くと 段と苦痛をとゝふので困りました。仕方なく医者とゝ相談をやつて第
病院へやりました。仕方なく入こうから二回を許りで医院さきました。然し病気は中々 癒
犬がいさつゝもして仕方のありません。さうして仕方のないうち
のら仕方がない。「おまえ」「馬鹿なくつて、待ごとも……」
「ランプの火に手をのせて熱くないんだ。不思議「ばゝあ」「あるや御ごよ」「へえ」「御ごよ、御ご
[illegible]
衣の「更紗の袋帯の表。清の陶器の表。清の陶器の表。夫の裏」

豆納　吹呂風　芋焼　喰薬　漬壺　布屯　衣紙
湯麥粉　酒罎　酒子玉　腐豆氷　凍煮　味噌調

○「血がおく」。「もきて居る竹林ぶ」
竹藪さん、こすまいて竹夫人ちさいよ。このいて竹夫人ちさいもえのに。
へよけりの訳藪ぶんざどゆうでもいいんだとさ。竹藪さん書いて下さよ、よう
竹のはるぶて竹ゝ」 冬のしたうはおいのに人ちゃ竹ゝ竹つて去ふいしもだもの、自分さ
ちっとは遊びにおたつていゝでせう。○○ちゃん今日も宮の庭の竹藪へ行こう。淡
自分丈は人がねむいのも構はずにいつまでも遊んでいるくんだもの。ねえ私ざつ
紅緋なお金はいくらでもあるんざとうら。入る竹銭は一文もないさうだけざども。
○今日は竹藪と一緒に遊びに行のうーねえ。ちゃんー今日は私の番ざうー

時雨るゝや黒木つむ家の窓明り　凡兆
風や川吹もどすさゝら波　百池
紅葉散て泥乾かざる冬田かな　虚子

冬の日　冬の月　冬雲　冬の雨　時雨　ましき
霰　霙　雪　霜　凩　冬山　枯野　冬田　冬川

まもえさん。
○海藻　海藻を食べれば人は今程寒暑に勝て有る人でなくてはなりません
少年ともあれ書上人の日達人は俳句を作る人ぞ。
○蕗者「あるいて帰ろうこの」「寒くなくつちゃい」「寒くるの帰えんこの俳句のさべかをるつる。そこ」
俳句でとつさうもます」
「私まきに出るの、とる俳句をさこ二枚とつゝ。一日俳句、一つは出る服、夫のう男の

浦風や巴なくつすむら千鳥　晴　長
松明消えて江の音寒し鴨の聲　雷夫
鶯や伺ひぬ栗田の七寶師　四明

○雨降の婦人二十五に笠かぶり。印象人。ホクでわるくなる。ペンセンとさ。

○雨降の婦人二十五に笠かぶり。印象人。ホクでわるくなる。ペンセンとさ。

○雨降の婦人二十五に笠かぶり。印象人。ホクでわるくなる。ペンセンとさ。

長崎師匠の句。
区者は一つ
長崎の句

霜　桂　鶴　淵　雷　水　寒
氷　桂　猪　鯨　鹿　木　兎
氷　氷　鳴　鴨　千　鳥　鶯　鶯
い　き　　　　島　　　　水　鳥

○開の酷暑。

あなたの句回でん夜中天を蛙が出るんですの……

「ぶつて夏がやさしい」「夜の短い時分」とえばいうでせう。少し間違ひ行りですね。

○蕎者　白いぶつぶつ……

此前来た時は日の短い時分であつた

○三日月さも三十五夫。一日

月のゑ姿にちつと。二月四日さも夫のにちつと。

○彼女のときは月桂冠中でセ十五夫のゑ姿を使つて俳。如夫を使つて一月のちは一

美人の那辺学校の校長でもあい——hill でする——hill でする。

彼後作法、人倫五常を重んずるよりも必ず見る。

見る、情義の者は必ず見る。朋つと朋つとは

見る。——夫ぞ美人は必ず見る。

おい。——夫ぞ美人は必ず見る。

蛙を生りつけるぢや。足て消極的ぢや。此文的お治相あ通によつて人に勝る沢は

械界ぢや。自らを知へる美ちや。人を傷ぬめりこの作に

倫し近頃 尼多頭いの鈴心うぬのとの脇つきの海鼠

長和にする方 盗ず人勝につ鐘のつちく。詩 此や 終 立 去 日 来 紙 太 子 設 規

つのちや。心ぶ占も 下ば 嬢 嗜 河 豚 に 合 な 入 し 入 ら ぬ。 鉄 面 ま ず 勝 つ ぶ や。

ちつ天ぶ。甲でもちびも 構ひ ぬ 強い 方 ず 勝 つ ぶ

○二個の者が same place occupy スル決にも行うね。甲のしを色い 怖ふう。この甲をはき 陽ちう二れ

の色はくるぬ 羽振は人ぶ。 蒙はんとふ。 城でき。 人るのちまとふとまくこうるぬ ぬや

ちぶ。自分の放蕩しちくきちまんぐるぬ人にもちぶやいけおいよしらぬ。 ぬん

勝が減つぬ色いたい丈色つてもういやにちつのぬ人に 強あんうちあすぬやおいらぬ

放蕩 自分の放蕩をしたしも悪いて。やるすやおいよしまんのすきるとぬ。

乾　鮭　梅　寒
河　豚　花　茶　山
鼠　海　冬　木
鮫　鱶　菊　枯
牡　蠣　柳　枯
鯨　花　散　紅　葉
枇　杷　花　蘇

坪下りぬ。

■ぬん ちりんくぬ。 ぬ。 強い、三分水浸めぬ。 ぬ。 ぬ。

入らぬ。 ぬ。 ぬ。

東北大學圖書館
和
79394
甲
昭和23年10月

俳書堂出版書籍目錄御申込次第進呈す

明治三十八年十一月十二日印刷
明治三十八年十一月十五日發行

編輯兼發行者　東京市日本橋區小伝馬町二丁目五番地　赤山仁三郎
印刷者　東京市京橋區築地二丁目二十番地　河本龜之助
印刷所　東京府京橋區築地二丁目二十一番地　株式會社國光社
發行所　東京市京橋區築地二丁目二十五番地　俳書堂

茶の花や鶯の子のなきならひ　涙化

舟墓ふ淀野の犬や枯尾花　儿童

萩枯れて山門高し南禪寺　子蕚

落葉　茶花　冬牡丹　冬薔薇　水仙　枯女郎花

石蕗花　枯萩　枯芒　枯葱　枯蕣　枯草　枯芋

手帳 No.4 （断片　明治38年～39年）